

里山の棚田地から生き物たちが消える？*

*A Creature Disappears from TANADA Place of the Village**

岩崎行伸**

2050年までの間に、現存する種の25%が地球から絶滅し、その速度は20分に1種になるという。わが国でも森林や里山は荒廃しつつ、この地に生息していたメダカやカエル等の身近な生き物たちが姿を消してゆく。

メダカ(絶滅危惧種)は全長3~4センチしかない小さな淡水魚であり、我々子どもの頃は本当に何処の水たまりにでもいた。余りにもありふれていたので、鮒や鯉等と比べると子どもにとって余り魅力のない、雑魚の代表のような淡水魚であった。

ところが1999年のこと、このメダカが何んと「絶滅危惧種」として絶滅を心配されているというニュースが流れたのである。子どもの頃魚捕りに熱中したことのある、我々の世代にはとても信じられないことであった。減ったことは事実かもしれないが、でもメダカに限って絶滅ということは考え難いというのが実感である。しかし、これはどうやら信じなければならぬ事実のようで淋しいことである。



図1. 菊川上倉沢棚田地(田んぼ)の環境景観

かつて、棚田・田んぼは用水路で水を引いていた。その用水路は田んぼとほぼ同じ高さであり、微妙な高さの違いを利用して水の入り口と出口が作られていた。一つの田んぼから、出た水が隣の田んぼに入る、という構造になっているものもあった。そのような用水路は地形に応じて曲がっており、深さも一定でないので、水の流れにも微妙な違いがあり、それに応じて違う植物が育っていた。子ども達が夢中で魚捕りをしたのはこのような用水路であった。秋になって田んぼから水が抜かれても用水路には水が残っており、窪みが「魚だまり」となって淡水魚が生き残っていたのである。

ところが、1960年代から始まった農業基本整備事業によって、自然の地形に応じて作られた田んぼに大きな変化が生じた。かつて、人力で営々と築かれてきた田んぼは、大規模な土木工事によって完全に作り変えられてしまった。田んぼの水が管理し易いように、用水路はU字管というコンクリートの管にされた。この管の機能は水田に清流を運ぶことである。

魚が隠れるところもなければ、蛙が卵を産むところもない。用水路は田んぼから効率的に排水するために、水田との高さの差が大きくなるように作られている。このため、水を抜くと田んぼは干上がる。U字管には「魚だまり」はないから、土の中に潜って生きるドジョウやメダカも生き延びることはできない。その結果、夏の「洪水」と冬の砂漠が繰り返されることになる。これでは生き物たちは生き残れない。

日本は稲作が中心であるが、それは米作を巨大なポットのようなところで効率的に作ることだけではない。日々の営みの中で米作りを重点におきながらも、家畜を飼い、裏山から肥料となる枯れ葉を集め、時々ドジョウやフナ・シジミを捕るなど（図2.）



図2. 棚田稲刈り全景観（菊川/上倉澤）

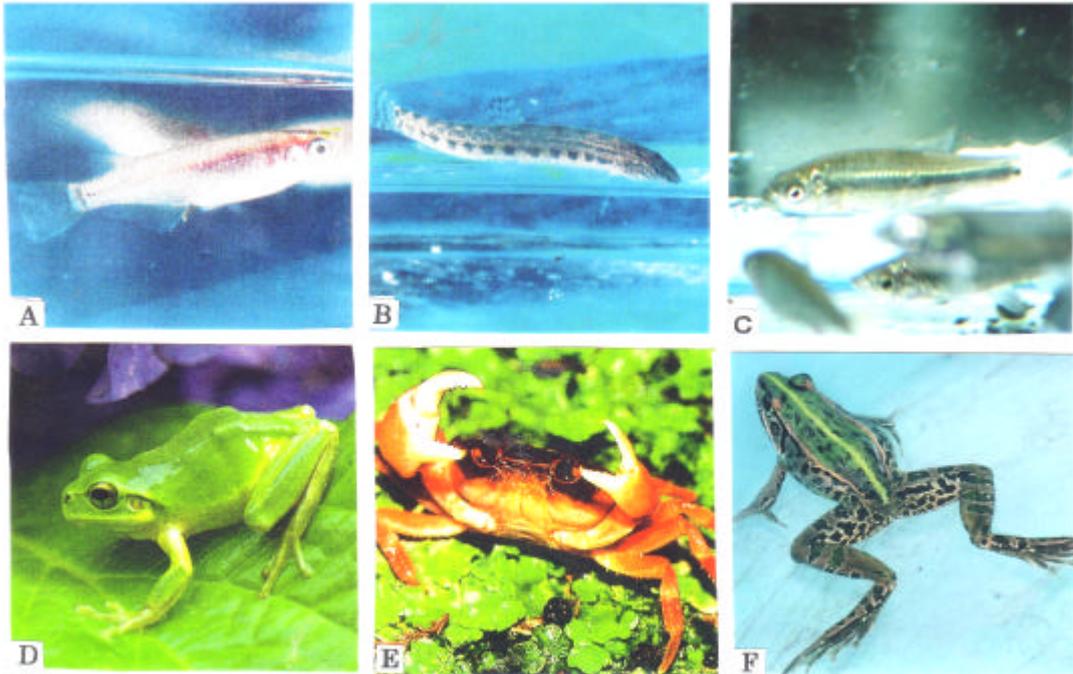


図3. 菊川上倉澤における棚田地の生き物たち (A:メダカ、B:シマドジョウ、C:カワムツ、
D: ニホンアマガエル、E:サワガニ、F:トノサマガエル)

様々な中で行われたものであった。田植えの時には若い女性が晴れ着で早苗を植え、近所の人たちが助け合って田植えや稲刈りを社会的通念として感謝することであった。

このような日本の里山環境は、生き物たち、高齢農業従事者、後継者不足等々が年々減りつつあり、その姿を消すことは必然となっている。

参考図書

- 1) 生きものたちのシグナル(2005):岩波書店、毎日新聞科学環境部著
- 2) 野生動物と共存できるか(2006)岩波書店、高槻成紀著
- 3) 静岡の棚田研究(2009):その恵みと営み、静岡新聞社、静岡県農林技術研究所編

添付資料

- 1) 菊川上倉沢棚田地(田んぼ)の環境景観
- 2) 棚田稲刈り全景観(菊川/上倉澤)
- 3) 田んぼの生き物たち(メダカ・シマドジョウ・トノサマガエル・アマガエル・サワガニ)

* 里山の絶滅危惧種の今、 **会員: 日本野鳥の会・昆虫写真研究会・自然環境と生きもの観察会